研究班番号【81】

日本の英語教育の是正　～スピーチの観点からの考察～

英語班：今坂　友哉

要約

日本の英語教育に足りないものを考察するために日本と海外の様々な国の英語を用いたスピーチを比較したところ、日本のスピーチにはジェスチャーが圧倒的に不足していることが判明した。さらに中国の英語教育や脳の構造などを参考にすると、言語の習得には実際に言語を聞き交流することが重要となることがわかった。よって日本は英語が義務教育になる中学より前の時期から英語を聞き、使用できる場を提供するべきである。

1. はじめに

本研究を始めた理由は、数々の英語能力検定試験で日本人の英語能力が低いことが示されているからである。本研究では、日本人に足りていない英語能力がどのようなものであるかを、言語表現の比較がしやすいスピーチの観点で考察し、現在の日本の英語教育の問題の指摘と改善案の提案を行った。

2. 研究手法

日本と海外の国（アメリカ・ドイツ・中国・フランス・スウェーデン）のスピーチを動画で視聴し、以下のように調査を行った。

＜調査①＞

使用されている単語や文法の違いを日本と海外で比較した。

これは日本に欠けている英語能力は、語彙力や文法の応用力といった言語能力であるとい う仮説の真偽を確かめるためである。

＜調査②＞

スピーチ中に使用されるジェスチャーの数をカウントし、日本と海外で比較した。

これは日本に欠けている英語能力は、実際に人と交流するときに用いられるジェスチャー のような非言語表現であるという仮説の真偽を確かめるためである。

3. 結果

＜調査①＞

各国のスピーチにおける文法表現には、明らかに難しい文法表現などは使用されていなかった。

＜調査②＞

各国のスピーチにおいて、ジェスチャーの数において以下のような違いが見られた。

	日本	アメリカ	ドイツ	中国	フランス	スウェーデン
ジェスチャーの数について	最も少ない。	ジェスチャーの頻度が最大。	比較的ジェスチャー数が多い。	日本と比べると多少の増加が見られる程度。	ジェスチャーがかなり高頻度で行われている。	フランスと同じく高頻度のジェスチャーが見られる。

４．考察

①ー今回の研究を通してー

スピーチで使用される英語表現に国独特の表現などはなく、日本のジェスチャー数が乏しいことから、日本と海外の違いは文法ではなく体の動きによる意思表現だと思われる。

②ー各国の英語教育を踏まえてー

現在、日本における英語教育は文法の把握を最優先に行っているが、同じアジアに属する国である中国では「英語を使うこと」を目的としたコミニュケーションを最初に行っている。そのような教育で培った外国語を使ったコミニュケーションの経験が、日本と中国とのジェスチャー数の違いに現れていると思われる。

また、脳科学の分野での研究では、人の言語獲得のプロセスにおいて、なるべく早い段階から言語を聞くことで言語を司る脳の部分が大きく発達すると証明されている（なおその後その言語を実際に使うとより効果的である）。今回、英語を母国語とするアメリカの話者は多数のジェスチャーを用いていた。それらの話者は幼少期から英語に触れ、英語を学んできたので、このことから、実際に英語を使い交流することが非言語言語の獲得を大きく助長していると考えられる。

５．結論

日本の英語教育は文法の把握を中心とした学習を本格的に始める前に、英語を聞き、更に英語を使って交流を繰り返していくべきである。

６．参考文献ならびに参考Webページ

手島　良 「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について 一発音指導の現状と課題一」 音声研究　2011

宮内　敦夫 「中国における英語教育の現状ー日本の英語教育を再考するためにー」2005

植村　研一「脳科学から見た効果的多言語習得のコツ」認知神経科学　2009